



第1期は、これから姿を教育界、旅行業界他多方面の意見を聞きながら方向付けをしたが、平成14年8月1日から平成17年3月31日までの3ヶ年を第2期として、全修協の目指す21

第2期のめざす方向
と取り組み計画

時代変化の状況や新しい教育の目的を果たすべく、21世紀の修学旅行についての在り方を明確に示す。

(4)新しい体験型学習の開発についていく。対応策を確立していく。

修学旅行で実施する体験学習は、教育改革の狙いの一つである体験型学習の重要な機会であり、これから修学旅行で実施する体験型学習の対応策を確立していく。

海外修学旅行の実施状況
全修協の継続調査と
旅行先における学
習内容、自治体教育委
員会の海外修学旅行に
おける促進施策状況な
を継続調査する。

修学旅行の手引書とする「修学旅行ハンドブック」を作成し、広くしていく。(3面へ続く)

供ブな
合うだけのよい環境
り、雰囲気が必要な
であろう▲虫の声が
れていく頃になると
んどは、色彩の世界
眼前に繰り広げられ
季節のうつろいの中
然の攝理ほど神秘で
いものはない

全修協の「21世紀修学旅行プロジェクト」
第2期計画のスタートにあたって

の実現に向けた具体的な
施策の展開である。

外修学旅行での学校間
交流の充実を図り、国際理解教育の最も基本的なフックタリとして、

学旅行での体験型学の理論構築と、学習結果を高める基本プロラムの開発をする。

各修旅委員会で継
実施している修学旅
実施状況調査は今後
逃焼へ寺へ本済院

語たどりう一ありの
まの自然の姿」を、そ
て自然と人間の関り
子ども達が本筋的こ

平成14年度修学旅行人口は
380万人と見込む

—文部科学省調査「学校基本調査速報」より—

このたび、文部科学省より学校教育行政に関する基本的事項を明らかにすることを目的として実施された「平成14年度学校基本調査速報」が発表された。

財団法人全国修学旅行研究協会(全修協)はこの調査速報をベースとして、更に厚生労働省がまとめた年度別出生数を参考として平成14から平成24年(2012年)までの「修学旅行人口」の推移予測をした。

和63年度(1990)におよそ560万人、平成14年度(2002)にピークとなつた0万人と推定、平成15年度(2003)に盛期の68%となつた。平成15年度以降の将来予測を見ると、減少は穏やかな傾向を辿るとなつておらず、10年後の平成24年度(2012)はおよそ348万人と推定、平成13年度に比して、43年後(平成25年)に発生することとなる。

昭和63年度(1990)における少子化率は、少子化を辿っていると一般的に認識されているが、平成元年以降の毎年の出生数は120万人前後を維持しており、ここ10数年は横這い状況と思われる。しかし、修学旅行の実施は小学校6学年、中学校3学年、高等学校2学年で主に実施されており、平成14年度出生の子供の最初の修学旅行は12年後(平成25年)に発生することとなる。

修学旅行人口は、昭和63年度(1990)における少子化率と、我が国の人口は、少子化を辿っていると一般的に認識されているが、平成元年以降の毎年の出生数は120万人前後を維持しており、ここ10数年は横這い状況と思われる。しかし、修学旅行の実施は小学校6学年、中学校3学年、高等学校2学年で主に実施されており、平成14年度出生の子供の最初の修学旅行は12年後(平成25年)に発生することとなる。

〔表-1〕学校数・学級数・生徒数(平成14年度)
 (出典：厚生省)

修学旅行新聞

発行所 財団法人
全国修学旅行研究協会
発行人 黒田武信
〒102-0074
東京都千代田区九段南
2-6-8 九段南ビル
☎ 03 (5275) 6651
<http://shugakuryoko.com>
e-mail shuryo@h2.dion.ne.jp

財団法人全国修学旅行研究協会（全修協）は、日本の教育の振興に寄与することを目的とし、教育を熱愛し子供たちの幸福を希求する人々の支持を得て、修学旅行の改善向上を目指して、全国的規模で活動する文部省許可の教育研究財団です。

は、学校別別の学校数及び修学旅行該当学年生徒数も発表された。また、1学級当たりの生徒数は地域によりつてばらつきが多いが、「表-1」は、特に、公立の小・中・高校及び私立高校(共に全日制)で、私立高校で285人となっている。既に、一部地域の小学級で45人学級からなっている。

鳳紋

続行ももらう。語たどりう。ありまの自然の姿を、そて自然と人間の関り子ども達が体験的に学習できるきっかけとて学校ビオパークがられている。子ども達を自然に親しませんか。もしれない▲今私ちの周りでは生物の息空間が次第に失わつつある。自然界に息空間が次第に失われるためには、それには合うだけのよい環境り、雰囲気が必要なであろう▲虫の声が眼前に繰り広げられ季節のうつろいの中の攝理ほど神秘でいものはない。



